I promessi sposi の歴史叙述
――マンゾーニの引用の技法

霜　田　洋　祐

要　旨

マンゾーニの歴史小説 *I promessi sposi* において架空の「発見された手稿」を典拠として語られる創作部分は，体裁の上では，本物の史料をもとに記述される歴史叙述部分と同じく,「事実の報告」である。こうした語りの体裁により，創作部分と歴史部分とが滑らかにつながるのであり，*I promessi sposi* の語りの手法に関する研究は，両部分の形式上の共通点を強調する傾向にある。しかし，それはあくまで表面上の一致である。本論文では,「歴史叙述」に特有の形式的特徴が見られるか，そして特に史料が効果的に引用されているかという観点から，両部分を詳しく比較する。それによって，歴史部分にマンゾーニの歴史家としての技量が発揮されている一方で，創作部分では「歴史叙述」の形式の模倣が不十分であることが明らかとなる。

キーワード：アレッサンドロ・マンゾーニ，『いいなづけ』，歴史小説，語りの技法，歴史叙述論

はじめに

19 世紀前半のヨーロッパでは，歴史小説と新しい歴史学との間に強い相互作用が働いていた。過去の慣習や生活様式を生き生きとドラマ化してみせる歴史小説の物語性は，実際，フィクションを排した歴史家の叙述にも大きな影響を及ぼした[1)]。歴史小説が旧来の歴史叙述に対抗するものと見なされることも稀ではなく，多くの小説家たちにとって，フィクションを交えつつも歴史の「真実」を語るテクストは「新しい歴史叙述」でさえあった[2)]。アレッサンドロ・マンゾーニ Alessandro Manzoni（1785-1873）の歴史小説 *I promessi sposi*（『いいなづけ』初版 1825-27, 決定版 1840-42）のメインプロットも，架空の物語ではあるが，綿密な時代考証に基づいて 17 世紀のロンバルディア地方という過去の世界とそこに暮らす人々をリアリスティックに描いている。つまり，それ自身で「新しい歴史叙述」と標榜され得るものであった。ところがマンゾーニは，このような物語にそれとは様相を異にした本来的な「歴史叙述」を挿入するという類を見ない選択を行った。

I promessi sposi の物語は，17 世紀の匿名の手稿を発見した人物（＝マンゾーニ）が，そこに記された話を現代語に改めつつ紹介するという形式で綴られる。〈著者＝語り手〉は，この仮構された事実の報告に，実在の史料をもとにした史実の報告，つまり正真正銘の事実の報告を差し挟む。この小説においては，多くの歴史小説のように史実と虚構とが識別不可能にまで

解け合うことはないが[3]，上のような語りの形式もその要因の一つに数えることができる。創作部分は架空の手稿を典拠とし，歴史部分は本物の史料を典拠とするといった棲み分けがなされるからである[4]。しかし，この形式は同時に，フィクションと歴史の叙述の滑らかな接続の要ともなっている。メインストーリー（あるいは匿名手稿の存在）が虚構だというのは，テクスト外の情報を念頭において初めて下される判断であり，テクスト内部に留まるかぎりにおいては，創作部分も歴史部分も同じ「事実の報告」として連続しているのである。

I promessi sposi の語りの技法に関する研究は，例えば Agosti（1989: 135-8）が創作部分と歴史部分の様々な水準における同質性を指摘しているように，この連続性のほうを強調する傾向にある[5]。語り手マンゾーニは，創作部分の典拠として本文中でも繰り返し匿名手稿に言及し（「偽装引用」），手稿の著者を時に「歴史家」と呼び（*PS*, XV, 55），彼を実在の歴史家と並置することさえある[6]。匿名手稿は一貫してひとつの「史料」として扱われているのであり，それゆえ創作部分は，実在の史料を参照する歴史部分と形式の上で多くの共通点を持つことになるのである。創作部分と歴史部分に形式上の連続性や統一感を見出す動きはまた，歴史学における「言語論的転回」以降の議論において，フィクションと歴史の叙述の差異が最小化された[7]ことにとも無縁ではありえない[8]。テクスト外の知識との照合によって記述内容の真偽を予断することなく，テクストの形式のみを問題にするとき，フィクションと歴史の叙述の差異は，全く自明のものとは言えないのである。我々の問いは，まさにこのような地点から発せられる。*I promessi sposi* において，わざわざ区分けされているように見える創作部分と歴史部分は，本当に形式的特徴が全く同じで，本質的な差異がないのだろうか。

実のところ，マンゾーニの歴史記述の技法を詳細に分析し創作部分と比較すると，共通点の影に特筆すべき相違が見えてくる。歴史部分に見られる「歴史叙述」特有の要素が，匿名手稿を典拠とする創作部分には欠けているのである。もちろん「歴史叙述」に特有の要素と言うのは，歴史を語るテクストのみに見られる特徴ではない。「小説」が他のジャンルの特徴を内に取り込む雑種的性格を有する表現形式なのだとすれば，歴史にしかない形式的特徴を検出するのは原理的に不可能である。しかし，「歴史を語る」という状況が，ある種の形式的特徴をもたらす強い契機となっていることはありうる。そのような特徴は，仮に小説の内に取り込まれていたとしても，やはり過去の事実に関する真面目な陳述としての「歴史叙述」にこそ特有のものと見なすべきであろう[9]。そして，このような意味で「歴史叙述」に特有と言える性質が，小説 *I promessi sposi* に挿入される史実の記述にも，少なからず備わっているのである。小説中の歴史記述にあてられた部分は，「歴史叙述的」と呼ばれてきたのであるが，単に架空の物語と対比して内容が史実だから「歴史叙述」というばかりでなく，テクスト上の特徴の見地からも文字通り歴史叙述と言えることになるだろう。一方，創作部分のほうは，理論上は「歴史叙述」に特有の性質をすべて模倣できるはずなのだが，その取り込みはかなり限定的となっている。

本稿では，まず第１章で，（1）執筆の動機や主題を提示する「序言」の役割と（2）他のテクストが歴史叙述に及ぼす作用に注目して，*I promessi sposi* の歴史記述に「歴史叙述」に固有の形式的特徴が見出されることを確かめる。同時に，それが創作部分において「模倣」されているか否かも明らかにしてゆきたい。第１章が *I promessi sposi* の歴史記述の全体を視野に入れるのに対し，第２章ではより的を絞って，「歴史叙述」らしさの度合いが増す 31-2 章（ペストの叙述）を中心に，諸史料の参照・引用のあり方を具体的に検討する。引用に注目するのは，それがマンゾーニの歴史記述において実在感（リアリティ）の獲得あるいは「真実効果」に寄与する重要な技法であり[10]，しかも匿名手稿の参照も「（偽の）引用」であるがゆえに，創作部分と歴史部分に形式上の連続性を見る場合の拠り所ともなっているからである。以上のような仕方で，従来，小説全体に対する役割という観点から考察されるのがほとんどで，そうでなければ叙述内容の正確さ（史料に忠実か，誤解や歪曲はないか）ばかりが問題にされてきた *I promessi sposi* の歴史記述を，語りの技法の水準において分析し，もって歴史の書き手としてのマンゾーニの力量を測ること，そしてその分析を通じて，形式上の類似が指摘されてきた歴史部分と創作部分には，肝心なところでやはり相違があることを明らかにすること，これが本稿の目指すところである。

1. *I promessi sposi* の記述の「歴史叙述」らしさ

歴史叙述に固有の特徴を手掛かりにフィクションと歴史の叙述を比較するにあたり，まず歴史記述部分の範囲を確認しておきたい。「歴史小説」である *I promessi sposi* において，歴史的事実にまつわる記述は随所に様々な仕方で現れるが，まとまった歴史記述が挿入される箇所は，以下の表のとおりである。28, 31-32 の三章が，専ら歴史記述に充てられている。伝記を「歴史叙述」の一種と考えるならば，第 22 章もそこに加わる。また「歴史叙述らしさ」は若干劣るものの，史料に記載された実在の人物であるインノミナートおよびモンツァの修道女に関連する記述にも一定の注意が必要となるだろう。

12 章前半	パンの価格が高騰しミラノで暴動に発展した経緯
27 章冒頭	マントヴァ・モンフェッラート継承戦争
28 章	暴動後の経過（1-13），飢饉の惨状（14-62）および戦争の経過と軍隊の南下（63-88）
31-32 章	ペスト禍

22 章	ボッロメーオ枢機卿の伝記

1.（1）「序言」：歴史部分の導入部

I promessi sposi に歴史記述が挿入される際には，「前口上」「序言」が付される。上記の全てのブロックの前で，長さに差こそあれ（7 パラグラフに及ぶ 31 章冒頭から 1 文の 11 章末ま

で)，〈著者＝語り手〉が口上を述べているのである。

歴史叙述（の本文）において〈歴史家＝書き手〉は，自己を消して事実自体に語らせようとするものと見られることが多いが[11]，本文の前の「序文」「前書き」等においては[12]，〈歴史家＝書き手〉が姿を現し，自身の仕事について語るのが通例である。創作の物語の全容が著者の想像力の中にあって読者には窺い知れないのに対し，歴史叙述の内容は，連綿と続く「歴史」の中から選ばれており，読者にも接近可能な対象を含む。それゆえ歴史の書き手には，対象の取捨選択の理由を説明し正当化することが強く要請される。つまり，本題に至る前の部分で歴史家の「自己」と「書く」行為とがはっきり表現されるのは，歴史を語るという行為の本質的条件にもとづいた特徴なのである[13]。*I promessi sposi* の歴史部分の「前口上」においても〈著者＝語り手〉の「自己」が現れる。語り手マンゾーニは，いわゆる「著者の一人称複数」を用いて介入するのである（cfr. 霜田 2012)。また，動機を開陳する場としての存在感は大きくないが，とにかく動機も述べられる。歴史記述の挿入は，第一に「我々の物語の理解 intelligenza del nostro racconto（*PS*, XXVII, 1)」を助ける，すなわち主たる物語の状況を明瞭にするという目的によって，少なくとも建前としては[14]，正当化されるのである[15]。ただし，ペスト禍の叙述の前口上（31 章冒頭）に限っては「物語の理解」だけが動機ではないと明言される[16]。ここまでで，少なくとも表層的な形式のレベルにおいて「歴史叙述」の通例と一致していることが確認されるが，さらに「前口上」に関わる別の特徴，主題の提示に注目すると，フィクションとの構成上の違いも見えてくる。

「歴史叙述」の序言では，「記憶に値する」事柄について知らせることを執筆の動機として述べるのが一つの典型であり[17]，*I promessi sposi* の第 31 章冒頭もこの系統に連なることになる。このとき必然的に，主題となる事柄について，本論が始まる前にそれが「何」であったのか，歴史の中でどのような意味を帯びたのかが述べられる点に注意したい。多くの歴史叙述に共通するこの性質，つまり叙述の開始前に語られる事柄（特にその結末）が「何」であるのか説明がなされるという現象は，歴史叙述に特有のものと言える。読者にもアクセス可能な「歴史」を対象とする叙述では，フィクションに比べて結末を隠しておく意味が薄く，何が起きたかではなく，どのような仕方で，なぜ起きたのかこそが，関心の対象となるのである[18]。*I promessi sposi* の歴史記述においても，対象となる事柄は通常，（メインストーリーにおいて何らかの形で触れられた後）前口上の段階で確認される。つまり「何」が起きたのかは，あらかじめ知らされるのである。例えば，ミラノの暴動についての叙述は，直前に主人公レンツォの目を通してミラノ市内のただならぬ様子が描かれ，レンツォ自身「反乱の起きた町 città sollevata」に来たと理解した後，〈著者＝語り手〉の「その混乱の理由と発端 le cagioni e il principio di quello sconvolgimento（*PS*, XI, 73)」を述べようという言葉で導入がなされる。叙述対象が何であるかは，それに「混乱」という「意味」が与えられることによって明瞭となり，以降はその「混乱」がどのようにして起きたかが問題となるのである。ほかの場合も，起

きたことが「飢饉」「戦争」あるいは「ペスト禍」であることは先に明瞭に述べられており[19]，そのあとの記述はまずもって，なぜ，いかにそれが起ったかの説明に傾けられることになる。一方，*I promessi sposi* の架空の物語のほうに目を向けると，「序文 Introduzione」において語り手は手稿に記された話を «molto bella»（*Intr.* 11）と形容するのみで（「これほど美しい話がずっと知られぬままになってしまうのかと残念に思われた」ことのみが記述の存在理由として明言される[20]）具体的な内容には触れないし，匿名作家自身の「緒言 proemio」からも物語内容は漠然としか想像できない[21]。ここに *I promessi sposi* の創作部分と歴史部分との一般的傾向の違いが見て取れる。つまり，登場人物たちが暮らす世界の歴史的条件の説明も含め「なぜ」「いかにして」は基本的に歴史部分にまかせ，創作部分は，物語の成り行き，すなわち「何」が起きたかへと向けられるのである。

1.（2）他の歴史のテクストとの繋がり

I promessi sposi の歴史記述は，それだけで閉じてはおらず，他の歴史のテクストとの連関のもとに成り立っている。このことは記述自体のうちに見て取ることができる。それは本稿第2章で扱う「引用」を通じて顕在化するばかりではない。例えば「未だ語られたことがない」という表現は，既存のテクストとの関係を問題にしているし，目下の記述を「一時的な間に合わせ」として提示するときは，暗に将来のテクストとの関係を示していることになるのである。

一篇の歴史書が，途切れることなく続く「歴史」の諸対象を隈無く収めることは実際上不可能である。また限られた対象を扱うにしても，証拠の発見や新たな知見・視点の導入を考慮に入れるならば，決して最終的な記述には到達しないことになる。それゆえ歴史のテクストは他のテクストと何らかの関係を持つことが宿命づけられており，そうした関係性は叙述の内にも顕現する。実際，例えば既存の叙述の不十分な点を指摘したり史料を引用したりして「すでに語られた」こととの関係を表明することは，「歴史叙述」の伝統において，ほとんど義務的なものとなっている。他のジャンルに見られる「間テクスト性」はあってもなくてもよいものだが，「歴史叙述」のうちで明に暗に他のテクストとの関係が示されることは，ジャンルに内在する不可欠の要素と言えるのである。

I promessi sposi においては，ペスト禍の叙述が「未だ語られたことがない」事柄と明示的に関わっている。ある記憶に値する事柄が未だ「歴史叙述」の対象とされていないことは，歴史家がその事柄に取り組むための強い動機となるが，普通その旨は「序言」等で紹介される。*I promessi sposi* の〈著者＝語り手〉は，ペスト禍の叙述の前口上（*PS*, XXXI, 1-7）において，出版された報告のほかに未刊行の報告や公的な記録を渉猟したことを明記し，「簡略ではあるが，虚偽の混じらない，一続きの情報」を初めて伝えるという企図を開陳している。しかも，その叙述は「誰か別の人がもっと巧くやるまで」の間に合わせとして提示される[22]。歴史家は，「未だ語られていないこと」を書き記し，記憶を継承する「新たな伝統を打ち立てる」ことを

目指す（Scarano 1990: 79）という状況にあって，自分の叙述が間に合わせで，将来的に完成させられるべき不完全なもので，要するに語り直しに開かれていると明言することがままある。「未完であること」は「歴史」に内在する特徴とも言えるため，これは謙遜を示す単なる常套句としての「叙述の未熟さの表明」とは異なり，字義通りの意味をある程度保つと見るべきである。*I promessi sposi* において，ほかにこのような叙述の不完全性のテーマおよび将来のテクストとの関連が現れる場面としては，巻末の付録「汚名柱の記 Storia della colonna infame」への言及（第 32 章末）が挙げられる。ペストが人為的に広められているという噂（迷信）について語るなかで，〈著者＝語り手〉は untore（ペスト塗り）の濡れ衣を着せられた市民に対する裁判も記憶に値する事柄，したがって語るべき対象，として言及するのだが，本篇との折り合いを理由に，詳細の記述は別のテクストに譲って，その参照を指示するにとどめるのである[23]。

一方，*I promessi sposi* の歴史記述のあり方に対して「すでに語られた」こと（つまり先行するテクスト）が及ぼす作用は，何よりもまず 28 章および 31-2 章にはっきり見て取れる。形式的構成への影響として最も目につくものとしては，斜体による書簡や grida（布告）など公文書の引用，引用符“ ”に挟まれた他の歴史家の報告の挿入，典拠を示す脚註などが挙げられる[24]。こうした引用，言及，参照の様々なあり方が本稿第 2 章の分析対象となるが，ここでは，28, 31-2 章の叙述が断定調にはならず，多くの推量やペンディング（判断の保留）を含むことに注意を払いたい。これらの章では，史料の不在が明言されることも多く，推測は推測であることがすぐにわかる仕方で記され[25]，また史料が異なる見解を述べる場合にそのまま諸説が併記されることも稀ではないのである[26]。こうした記述のあり方は，「著者」が出来事の全てを知っているフィクションよりも，「歴史叙述」にふさわしいものと言える。歴史を語るテクストも，信頼のおける史料のみに依拠し，議論の余地の少ない「事実」だけを語るとすれば，確かに断定文が中心になるが，それは教科書や概説書など一部の例外に限られる[27]。本来の「歴史叙述」においては，いつも史料の証言に信頼がおけるとは限らず，歴史家は，怪しげな証言に疑問を呈したり，複数のテクストが食い違う場合に判断を下したり判断を保留したりしながら議論を進める。そして頼りになる史料を欠く場合には，推測を披露して歴史の間隙を埋めるのである[28]。

28, 31-2 章以外に見られる明示的な参照としては，1 章はじめの bravi（ならず者）に対する布告の長々とした引用（斜体）および 19 章［インノミナートの来歴の叙述］におけるジュゼッペ・リパモンティ（1573-1643）の *Historia patria*（『ミラノ史』1641-43）からの引用（引用符を使用）が目を引く。また，インノミナートの場合と異なり，モンツァの修道女の来歴は具体的描写のほとんどが創作であり引用も個別の参照もないが，事前に上記『ミラノ史』への言及（脚註）があって実在の人物であることは担保されており[29]，物語の終盤（37 章）で彼女の後半生が簡単に語られる際にも同史料が再度紹介される[30]。これに対し，いま挙げなかった歴

史部分は，反対に明示的な典拠がほとんど無い記述となっている[31]。この場合，歴史の教科書に見られるような断定文を基調とする叙述となるが[32]，歴史部分の第一の存在意義がメインストーリーの理解を助けることにあり，そのために「手短に」済ませるべきであるならば，むしろこちらが自然な形とも言える。ただし，記述の簡略さは，それが極まるとある種の効果を生むことは見過ごしてはならない。例えば 27 章冒頭，マントヴァ・モンフェッラート継承戦争については多くの言葉が費やされず，駆け足の説明で片付けられているが，このような語り方は，〈著者＝語り手〉が小説中で見せる旧来の歴史叙述に対する批判的態度とも呼応するものである。「戦争」が従来,「わけても歴史的と名指される事象」（*PS*, XXVIII, 63）であり,「偉業」として長々と記述される対象であったことを踏まえるならば，記述の簡潔さ自体に，旧来の歴史叙述に対する鋭い批判の意味が生じてくるのである。

さてここで，*I promessi sposi* のフィクションの記述に目を向けると，レンツォとルチーアの物語は，その話を伝える唯一のテクスト，匿名の手稿が典拠ということになっていた。物語をすでに語ったテクストが存在することになるが，それは世に知られていなかった手稿であり，活字化もされていないので,「未だ語られたことがない」ことの範疇にも入る。困難な「書き直し」の作業という設定でもあり，理論上は，創作部分の叙述も，後世のやり直しに開かれた一時的な間に合わせと見せることができたはずである。しかし，実際にはそのような装いは施されておらず，語り手以外の人物がこの手稿を参照するという仮想的状況が示唆されることもない。また，手稿の「書き直し」は広い意味での引用であり，言及も頻繁であるが,「一連の出来事を取り出して言葉遣いをやり直す」（*PS*, *Intr.* 11）という指針のもと，手稿に対しては本文中で引用記号が一切使われない（本稿 2.（1）参照）。これまで看過されてきたが，この事実は，匿名手稿の「引用」が実在の史料のそれと全く同じではないことを端的に示していると言える。

ここまでの分析によって，*I promessi sposi* の歴史部分には「歴史叙述」に固有の形式上の特徴が見られること，ただし歴史記述の各ブロックの「歴史叙述らしさ」には濃淡があり，ペスト禍の叙述を頂点に階層が形成されていることが確認された。これは従来の指摘，あるいはそもそも一読して得られる印象と異ならない結果とも言えるが，それを内容や単なる分量の問題に還元されない水準で裏書きすることができたのである。そして，こうした形式的構成の水準において，歴史部分の最上位（ペスト禍の叙述）が「歴史叙述」の一例として本物の歴史書と遜色ないことも確認できる。さらに，同じ「歴史叙述」の特徴が，体裁上は「事実の報告」であるメインストーリーの部分には備わっていないことも浮き彫りになってきた。歴史部分と創作部分に偶発的ではない形式上の違いがあることは，読者が *I promessi sposi* の虚構的言説と事実的言説とに直感的に差異を感じる（cfr. Petrocchi 1971: 132）ことの一つの具体的な要因と考えることができるため，注目に値する事実と言えるだろう。

2. 括弧の引力：引用と真実効果

さて，*I promessi sposi* の歴史部分が単に史実を語るばかりではなく，テクスト上の特質からも「歴史叙述」と見なされうることが明らかになったところで，いよいよ歴史小説 *I promessi sposi* の語りのあり方を決定的に特徴づける要素「引用」の詳しい分析に移りたい。マンゾーニはレファレンスを開示せずに史料の記述を利用することも多く，下敷きとされた史料の特定に関する研究も膨大であるが，ここでは史料を引いていることがテクストの上で明示されているケースを対象とする。史料を利用した「借り」が示されないことが多い以上，明示的な引用および典拠の提示は，「負債の返済」というより，別の何らかの効果を意図して為されたものと想定される。

マンゾーニが自らの歴史記述と既存のテクストとの関係を最も明瞭に表現するのは，31 章冒頭である。これから記す «racconto»（物語），つまりペスト禍の報告は，メインストーリーに従属しない自律的価値をも有すると宣言した後，〈著者＝語り手〉は，どのような史書・ドキュメントを渉猟したか，そしてそうした史料がいかなる有り様であるかを説明するのである。そして前口上の終わりに，叙述に際して試みたことが次のように記される。

> 我々が試みたのはただ，最も一般的で最も重要な諸事実を見極めて確かめ，それらの理と性質が許す限りにおいて，それらを推移した現実の順序に配置し，それら相互の働きを観察すること，そして，このようにして，その災禍の，簡略ではあるが虚偽の混じらない一続きの情報を，誰か別の人がもっと巧くやるまでのさしあたり，提供するということである。（*PS*, XXXI, 7）

ペスト禍について，「事実」の見極め，現実の順序への配置，影響関係の観察を行って，簡潔かつ一貫性のある話にまとめようとしたというのであり，それは今まで誰もやってこなかったことである。ただ，「一続きの，切れ目のない continuata」話といっても，調査・研究の結果としての「事実」のみが物語風に綴られるということではない。このあと始まる記述は，肯定の断定文を基調としてすらすらと進むのではではないし（12 章前半，22 章，27 章冒頭はそうであった），史料のパラフレーズが著者の言葉と継ぎ目なくつながるわけでもない（匿名手稿の「書き直し」はそうである[33]）。ペスト禍の叙述では，他のテクストを直に引用して検討することによって，「事実」に至るための研究の過程（の一部）が開示されるのである[34]。文体や言葉遣い等の異なる他人の文章を呼び出し，テクストが言わばまだらになることは，「物語」としてのまとまりを損なう恐れがあり，メインストーリーとの兼ね合いで求められる簡潔さに反しているように思われる。しかし，こうした叙述形式は，何より事実を語るテクストであると理解されるために有効なのであり，記述内容を「事実」として伝えようという著者の意図に

は完全に適合すると言えよう。

引用に代表されるような仕方で，テクストの中で史料との関係を開示することは，生き生きとした物語性によるリアリティとは別種の現実感，語られる事実を本当のことと思わせる効果,「真実効果」（本稿註 10 参照）をもたらす。ただ，引用なら何でもよいということではなく，引用の種類や巧拙に応じて「真実効果」が発揮される仕方や程度も変わってくる。本章では，*I promessi sposi* に組み込まれた「歴史叙述」において駆使される多様な引用・参照を幾つかのパターンにわけて検討し，マンゾーニの歴史叙述の技法を探ることとしたい。

2.（1）一次史料に内在する“力”を引き寄せる

まず，他者の言葉の明示的引用，つまり他のテクストに記された言葉をそれとわかるようにそのまま挿入すること自体が発揮しうる効果について確認しておきたい。マンゾーニは，ペストの叙述の導入（31 章冒頭）で，事件と同時代に書かれた文献について「常に，鮮烈で，固有の，そして言わば説明のしようのない力がある」と述べている。ここでの趣旨は，自らの叙述によってこの力の全てを伝えることはかなわないので，こうした文献を読む意味がなくなることはない，つまり十全な理解のためには同時代史料の通読も奨励されるということである[35]。しかしそうは言っても，このような力を有する史料の言葉は，括弧“ ”や斜体でマークされて小説の本文に直接現れてもいる。これは，パラフレーズしては失われてしまうような独特の力の一部を引き出す作業にほかならない[36]。コンテクストから切り離され，手書きの文字は活字化され，ラテン語ならば翻訳もされ，引用文は変質を免れないが，それでもマンゾーニのものとは明らかに違う文体であり，固有の癖を残している。語られる内容にどこまで信頼がおけるかはまた別だが，事件と同時代を生きた書き手の存在の目に見える痕跡は，史料自体の実在をありありと感じさせるのである。

もちろん，これは架空の書き手に存在感を付与するのに応用可能であり，実際「序文」の冒頭に転写された匿名作家の「緒言」は，17 世紀特有の文体を模してその効果を担う[37]。しかし，むしろ注目すべきは，この技法が「序文」の外では見られないことである。19 世紀の語り手の「語り直し」は匿名手稿の単なるパラフレーズに終始してはいないため（cfr. Scarano 2004: 175-9），個々の記述が匿名作家と語り手のいずれに属するのか曖昧になることも多い。そこで語り手は時に応じて「ここで我らが匿名作家は述べている」といった定型句で匿名作家に帰すべき発言を明示するのだが，この場合にも引用記号は一切使用されず，表記レベルで「原文」の色を残そうという意図は感じられない。つまり，オリジナリティを直に感じさせる「原文」が括弧に入って本文中に現れるのは，実在の史料に限られるのである。

2.（2）同時代性，直接体験の強調

一次史料が独特の力を発揮するのは，その書き手が対象となる事件を同時代のものとして体

験しているという事実に負うところが大きい。しかし，書かれた内容，特に個別の出来事の具体的な記述の信憑性を問う上では，単に証言者が同時代を生きただけでは担保として十分ではない。

信憑性を高める要素としてわかりやすいのは，書き手自身が事件に居合わせた目撃者であることである。それゆえ書き手自身がその点を強調するのは当然と言えるが，以下のケースでマンゾーニは，まさにそのような箇所を選んで引用している。

a）“Vidi io,” scrive il Ripamonti, “nella strada che gira le mura, il cadavere d’una donna.... Le usciva di bocca dell’erba mezza rosicchiata, e le labbra facevano ancora quasi un atto di sforzo rabbioso.... Aveva un fagottino in ispalla, e attaccato con le fasce al petto un bambino, che piangendo chiedeva la poppa.... Ed erano sopraggiunte persone compassionevoli, le quali, raccolto il meschinello di terra, lo portavan via, adempiendo così intanto il primo ufizio materno.”（「私は見た」とリパモンティは書いている。「町の城壁をめぐる道で，ひとりの女の遺体を… その口からは半分齧られた草が出ており，唇はいまだ怒り狂って奮闘しているかのようだった… 肩には小さな包みを携え，胸には産着で赤ん坊を結わえ付けており，その子は泣きながら乳房を求めていた… そしてそこへ哀れみ深い人々がやってきて，哀れな幼子を地面から取り上げ，よそへ連れて行きながら，母としての最初の務めを果たしていた」*PS*, XXVIII, 42. 下線は論文執筆者、以下同様）

b）“Io lo vidi mentre lo strascinavan [: un vecchio scambiato per un untore] così,” dice il Ripamonti: “e non ne seppi più altro: credo bene che non abbia potuto sopravvivere più di qualche momento.”（「私はその男を引きずっていくところを見た」リパモンティは述べている。「彼についてそれ以上は知らない。少しの間しか持ち堪えられなかったに違いないだろう」XXXII, 10）

いずれもリパモンティ（『1630年ミラノのペスト』1640）から引かれている（*De peste,* I, 29; II, 35）。この史料の記述は，実は引用文aの直前の描写（飢饉の悲惨な影響が極まる様子；*PS*, XXVIII, 38-41）でもそのまま利用されているのだが，〈著者＝語り手〉はその旨を明らかにしていない（レファレンスのない「地の文」となっている）[38]。惨状を劇的に描き出すのに適し，しかも本人が「見た」と述べている具体的なエピソード（赤ん坊を抱いたまま餓死する母親）こそが，はっきりリパモンティの言葉とわかるように引用されるのである。引用文bのほうは，「ペスト塗り」の存在を信じた市民たちが疑わしい人物を見つけ出しては制裁を加えていたことの証拠として提出された二つのエピソードの一つである。リパモンティ自身，この

二つを選んだのは，日々行われていた制裁の中で最も残酷な例だからではなく，どちらも偶然自分が居合わせたからだと述べており，マンゾーニもエピソードを記す前にその旨を紹介している。この場合は，引用部分の前後も当該エピソードの記述であり，括弧の中には入らずとも同じ史料が利用されているのは明らかだが（*De peste*, II, 34-8. Cfr. Repossi 2009: 570-2），あえて括弧を使って再現される箇所は，やはり「私は見た」という言葉を含むのである。

また，叙述の重要なソースとなる史料を著した人物，リパモンティやアレッサンドロ・タディーノ（1580-1661）らについては，単にその報告内容が伝えられるだけでなく，彼らが職務上多くの重要な情報に接近可能であったことも強調される。前者については著述家としての能力の高さも小説中で明確に評価されているが[39]，それだけでなく，市参事会に指名された歴史家として必要な情報収集が容易であったものと推察されており（*PS*, XXXI, 25），また調査の過程で後者タディーノと面談したことも記されている（XXXI, 15）。そのタディーノはミラノ市保健局に勤める医者であるが，疫病による死者の増加の報を受けて調査に派遣され（XXVIII, 12），ミラノ総督へ具申する任を負うなど（XXVIII, 69; XXXI, 15），ペスト対策に直接携わった人物として描かれているのである。

それに対し匿名作家はというと，転写された「緒言」によれば，若い頃に起きた事件を記す人物ではあるが（«*questo Racconto auuenuto ne' tempi di mia verde staggione*» *PS*, *Intr.* 6），その事件を知り及んだというだけであり（«*solo che hauendo hauuto notitia di fatti memorabili*», *Intr.* 3），目撃者とは言えない[40]。しかも小説の草稿と比較すると，目撃者ではなくなったことがわかる。小説の第一草稿 *Fermo e Lucia* の「第一序文」（最初の数章と同時期に書かれた序文）の段階では，匿名作家が自らの目で見たことが強調されていたのである[41]。この意味において，記述の信憑性に関わる目撃証言という価値は，意図的に匿名手稿から消されたと見ることさえできるだろう。

2.（3）御し難い現実と史料の誤謬：史料批判の問題

目撃者や実行者としての直接体験ではなく，伝聞情報に依拠して出来事を語るとき，また出来事自体を離れ，その「原因」に関する思弁を始めるとき，同時代を生きた人々も，いや彼らこそ却って間違いを犯しやすい。自分が巻き込まれてしまっている現実を客観的に眺め，適切な情報のみを選び出し，出来事の意味を誤りなく解釈し，因果関係の秩序のもとに整然と把握する，などという技は通常の人間の限界を超えている。

マンゾーニも，やはり 31 章冒頭において，実在の史料には誤謬や限界があると率直に述べているが，それはまた自身の史料に対する批判的姿勢を見せることでもある。

> 同時代の多くの報告の中で，一つとして単独でそれ［＝ペスト禍］について少しでも明瞭で秩序だった考えを抱かせてくれるに足るものはない。同様に一つとして，そうした考え

を形作るのに役に立たないものもないが。[…] 各々に，別の報告には記録されている，本質的事実が抜けている。各々に物的な誤りがあって，別の報告，あるいは刊行済み及び未刊行の現存する僅かな公文書の助けを借りて，それと気づき，正すことができるのである。(*PS*, XXXI, 3)

ここでは，個々の誤りが諸史料の補完関係によって解消されることも述べられているが，それはマンゾーニ自身が適切と信じる情報に辿り着くために行った作業にほかならない。こうして史料の限界を指摘することによって，むしろ最終的な書き手に対する信頼の度が高まると言えるだろう。また，諸史料間で食い違う情報を実際に紹介することにより，誤り自体も記述の対象となる。例えば上述のタディーノとリパモンティは，最初にミラノ市にペストをもたらした人物とその状況について記述を試みているのだが，互いに名前も日付も一致しないし，どちらの日付もより確かなデータと合致しない。この点を指摘しながら，ともかくもマンゾーニは彼らの提示する情報を紹介するのである。その上で，日付については蓋然性の高い期間が提示し直されている（XXXI, 24-5. 本稿註 26 も参照）。

現実は捉え難く，人間は間違いを犯す。そうした常識的な感覚に違うことなく，歴史家の記述にも誤謬があり，歴史叙述的章における〈著者＝語り手〉はその点を隠さない。ところが，匿名作家は間違うことがないのである。文体や修辞法といった «dicitura» こそ手酷く難じられるが，手稿の伝える «fatti»（出来事）については，用心のための「意図的な省略」が問題になるくらいで，訂正が必要となることは決してない。語り手は「序文」において（*PS*, *Intr.* 12），史料を渉猟し，本当に手稿が記すような仕方で「世の中が進んでいたのか」調べたと述べる。それにより「類似の事象 cose consimili」や「より強烈な事象 cose più forti」が同時期に見られたこと，登場人物の幾人かが確実に実在したことが確認され，もって信憑性についての疑いは晴れたとされる。事件を語る唯一の証言という設定ゆえに，匿名手稿の内容の真偽については，史実と矛盾がない「起こりえた，ありそうな」ことか否かを問うことしかできず，それ以上には近づけない。実際，本文中ではもはや「史料」としての真偽は真剣な考察の対象にならない[42]。実在の史料については史料批判の過程（の一部分）が本文中で示されるのに対し，匿名手稿については批判作業（の一部分）が擬似的に開示されることはないのである。

2.（4）意図しない証人の召喚：推論の証拠としての引用

史書が信用できないとき，互いに食い違うとき，それを利用する〈著者＝語り手〉は，何らかの判断を下し，推論をし，または判断を保留するさまを見せる。ここには記述の真意を問う解釈の作業がかかわっているが，その作業は，公文書や書簡といった，もともと歴史の伝達を意図していない文献を相手にするとき，さらに前面へと押し出されてくる[43]。そうした文献から情報を引き出すには推論が不可欠であり，しかも単に得られた結果だけを記すのでないか

ぎり，読み取り作業がテクストに書き込まれることになるのである。

31 章でマンゾーニは，人々が unzione（毒性物質を塗ってペストを広めるという想像上の犯罪）を信じるきっかけともなった二つの事件の詳細を紹介するにあたり，tribunale della sanità（保健局特別委員会）からミラノ総督に宛てられた書簡を引いている。一つ目の事件は，大聖堂内の男女を分けるための仕切りに何かが塗られるのが目撃され，調査に赴いた保健局長が仕切りのみ洗えばよいとしたにもかかわらず，仕切り以外に多くの長椅子も外に運び出され，群衆の目に曝されたというものである。もう一つは，明くる朝，市内の至る所で家の扉や壁が汚されているのが見られたという事件である。第一の事件のために大聖堂の椅子や壁にペストが塗られたと噂になり，かつ信じられたことは，当時の回想録によって認められるが，事件の真相は書簡が見つからなければ想像するよりなかった，とマンゾーニは述べている。そのため斜体で書簡の一部を引いていることは，まず，事件の叙述全体に信憑性を与える役割を担うと言える。ただし，引用されるのが，仕切り（だけ）を洗うようにという保険局長の指示の理由 «*più tosto per abbondare in cautela che per bisogno*»（「必要だからというより，用心を重ねるために」，*PS*, XXXI, 58）である点にも注意が必要である。この言葉からは，保健局側としては「ペスト塗り」を本気にしていないことが窺われるのである。第二の事件については，保健局側が，事情聴取や動物実験（犬で検証）に触れつつ，«*che cotale temerità sia più tosto proceduta da insolenza, che da fine scelerato*»（「このような無鉄砲は，悪辣な目的のためというより，不遜から生じた」）という意見を寄せていることが記される。やはり斜体で引かれたこの意見からも保健局が「ペスト塗り」を信じてはいないことが推察されるが，その点について今度ははっきり〈著者＝語り手〉による解説がつく。引用の直後にコロン（：）が付され，「この時点までは，存在しないものを見はしないだけの精神の落ち着きが彼らにあったことを示す考えである」（XXXI, 62）という言葉が続くのである。さらに，事件の首謀者の通報に報奨を掲げた件（保健局特別委員会の布告）について同書簡が報告する箇所も引かれるが，その引用は「ペスト塗り」そのものは疑いつつも群衆の圧力に屈して妥協したことを物語る «*per consolatione e quieto di questo Popolo*»（「この人民を宥め，落ち着かせるために」，XXXI, 66）という言葉を含む。そして続くコメントは，こうした「ペスト塗り」の実在を疑う理性的な推論が，布告自体の文言からは見て取れない（隠されている）ことに対する非難となっている。マンゾーニは二つの事件の詳細を記した動機として，集団的誤謬においては「それが辿った道のり，様相，それが人間の頭脳に入り込み，征服した仕方」を観察することこそが「最も興味深く最も有益」だという見解を述べている（XXXI, 64）。ある時点までは信じられていなかった，つまり理性が活動していたということが，その観察の第一段階となるのだが，問題の書簡から選び出され引用されるのは，まさにそのような見方の裏付けとなりうる言葉，つまり「ペスト塗り」を信じていないことを示唆する言葉なのである。

もう一つ，より分かりやすい例を挙げよう。小説第 1 章の冒頭，ブラーヴィと呼ばれる輩が

登場したところで，〈著者＝語り手〉はブラーヴィという「種 specie」の「主な特徴，その消滅に傾けられた努力，その堅固かつ旺盛な生命力について十分なイメージを与えてくれる」布告を引用する（*PS*, I, 13）。斜体での複数の布告の引用は数ページにわたるが，布告の字句は直接ブラーヴィについて解説するものではない（その意味では読み飛ばしてもかまわない）。読み飛ばしたくなるほどの長さで，繰り返し布告が引用されていることが大事なのである。布告が何度も出されている，ということは，仰々しい厳しい法令にもかかわらず彼らは絶滅しなかった。1628 年の前にも後にも布告が出されている，ということは，当時ブラーヴィは多数存在したはずだ。「これで十分，我々が扱っている時期に，やはりブラーヴィがいたと確信がもてる」（I, 25）。単にブラーヴィと呼ばれる連中がいたと解説するのではなく，こうした推論の過程を一緒に辿ることによって読者を納得させる。そのために引用が役立っているのである。

2.（5）再検証の可能性とレファレンス

史料が引用され，解釈の結果がその推論の過程とともに提示されるならば，読者の側がそれを検証し，また反証することも容易になる。直接の引用によって史料の字句がテクスト内に現れない場合も，議論の組み立てに利用された事柄の出典が提示されていれば，その叙述は検証に開かれていると言える。もちろん読者が実際に原史料にあたって確かめる以前に，レファレンスの提示によって検証の可能性が示唆された時点ですでに，特有の効果が生じると考えられる。要するに，読者は真剣な事実の陳述であるという印象を受けるのである。

一般に小説の内容が純然たるフィクションでないほど，つまり，何らかの具体的な事実に基づいているほど，「著者」による脚註は多くなる傾向にあるが（cfr. Genette 1989 [1987]: 326），*I promessi sposi* はとりわけ出典を示す脚註の多い小説である。ウォルター・スコット（1771-1832）の『アイヴァンホー』（初版 1819）やアルフレッド・ド・ヴィニー（1797-1863）の『サン＝マール』（初版 1826）に見られる脚註は，内容に関する註釈や意見表明であることも多い。それに対し *I promessi sposi* 初版（27 年版）の脚註は，41 回中 40 回が他のテクストへのレファレンスである[44]。そのうち 38 例が 28, 31-2 章つまり「歴史叙述的章」に集中する（各 4, 14, 20 例）。対応する本文または脚註自体に明示的な引用（翻訳も含む）があるのは 20 例で，その他の箇所では当該史料の字句そのものは現れない。しかし，脚註に表された文字列は，基本的に該当のページあるいは節までを詳らかにしているため，引用と同じように他人の言葉（の存在）を具体的に指示していると言える[45]。それゆえ，こうした脚註も，事実の陳述という構えを見せる効果は十分に備えていることになるだろう。

一方，読者には開かれていないテクストである匿名手稿について確認しておくと，「匿名作家はこう述べている」といった言及にあわせてページ等が指示されることはないし，目次や叙述の順序といった位置情報さえ開示されることはない。理論的には詳細なレファレンスを模倣

的に挿入することもできたはずであるが，正真正銘のレファレンスのほうの効果を損ないかねない偽のレファレンスが提示されることは実際にはないのである。

以上，*I promessi sposi* の中に目に見える形で現れる史料の引用・参照の特徴を見てきた。もちろん，これによって全ての類型が尽くされたとは言えず，また重複している部分もある。しかし，この不完全な例示によっても，*I promessi sposi* の歴史記述において，典拠となった諸史料は，闇雲にではなく，叙述に現実感が付与されるよう，効果的な内容と場面が選ばれて引用されていることが明瞭になってきたと思われる。一方，フィクションの物語における匿名手稿の参照という模倣が，この水準にまでは踏み込んでこないということも特筆に値する。この事実は，「真実効果」を目指した引用の作業が *I promessi sposi* の事実的言説を印づけるという見方を裏付けるとともに，小説の体裁の要と言える「偽装引用」がどのような効果をどの程度まで発揮しているかを測る上でも重要となるであろう。

おわりに

〈著者＝語り手〉が「史料」を参照しながら「事実」を伝えるという表面上の形式の一致により，確かに *I promessi sposi* の創作部分（メインストーリー）と歴史記述部分は滑らかに連続している。しかし，真面目な歴史の報告であることと強く結びついた形式上の特徴に注目し（本稿第１章），また叙述に実在感（リアリティ）を与える技法という観点から「引用」を分析すると（第２章），実は両者の形式に本質的な差異があることが明らかとなった。歴史記述部分は，正真正銘の「事実の陳述」として理解されるよう意図されたものであり，そこでは歴史の著述家としてのマンゾーニの力量が発揮されている。それと引き較べると，創作部分は，歴史叙述の技法の模倣が不十分であり，表面上その体裁を整えたばかりとさえ見えてくるのである。

もちろん，実在感を与える語りのあり方は，本稿で取り上げたものが全てではない。むしろ，*I promessi sposi* の歴史記述のような，伝えるべき事実を証するために他のテクストの字句を戦略的に呼び込むまだらなテクストよりも，同時代の歴史家オーギュスタン・ティエリらの目指した継ぎ目のない語り（ナレーション）（本稿註１参照）のほうが，当時としては標準的であったかもしれない。しかし，ページを開く前から事実の陳述であることが予期される歴史書とは異なり，*I promessi sposi* は全体としてはフィクションなのである。しかも，現実感をもたらす生き生きとした物語性は，もともと「小説」こそが備える特徴である。だとすれば，書き手が自己の姿を消して事実が語るに任せていたのでは，テクストの内部では史実と虚構が区別をなくしてしまうだろう。ここにおいて，物語による迫真性とは別種のリアリティが必要となるのである。その意味で，引用を巧みに利用したマンゾーニの「歴史叙述」は，逆説的に「小説」の産物とも言える。その真実効果のあり方は，発見された架空の手稿の「書き直し手」として〈著者＝語り手〉の遍在を可能にする小説自体の設定と，そして何より小説の中に「歴史叙述」を

織り込むという独特の選択とに，強く結び付いたものなのである。

註

1）ニッコロ・トンマゼーオは，彼の手になるフィレンツェ版マンゾーニ作品集（1828）の前書きにおいて，スコットの歴史小説が歴史叙述の方法を革新したと指摘している。「歴史小説はヨーロッパにおいて歴史を再生させるものであった。ギゾーやティエリはウォルター・スコットなしには恐らく存在しなかっただろう」（Tommaseo 1828: XVII）。シャトーブリアンの『殉教者』（1809）に感銘を受け，次いでスコットの歴史小説に触発されたオーギュスタン・ティエリが，歴史の記述のために選んだのは物語形式であった。クロード・フォリエルを通じてマンゾーニとも交流があったこの歴史家は，歴史は論証するものではなく物語るものだと考えた。*Lettres sur l'histoire de France*（1827 年に書籍化）の「序言 Avertissement」でティエリは次のように述べている。「歴史学の領域においては，提示という方法がいつでもいちばん確実な方法である。もっともらしい議論を導入すると，真実性を脅かすことになる。[…] 論述形式を捨てて物語形式をとり，自分の姿は消し，事実そのものをして語らしめておくことで，よりよく成功するだろうと思った」（小倉 1997: 55 より引用）。その一つの実践と言える *Récits des temps mérovingiens*（『メロヴィング王朝史話』1840 年に書籍化）の末尾でも «la narration complète»（完全な語り）こそが事実の最良の証明となるという見解が表明されている（*Récits*. 384-5. Cfr. Barthes 1988 [1967]: 149）。Bigazzi (1989: 11-2; 1996: 95-119); Scarano (2004: 180-9); Macchia (2000: XIII) も参照。

2）Duchet（1975: 257）は 1815-32 年の歴史小説の序文を読み比べ，作家たちの主張が「歴史を飾る orner l'Histoire」から「歴史を証明する prouver l'Histoire」さらには「歴史である être l'Histoire」へと変化していく様を跡づけている。歴史小説には，歴史の新しい叙述形式の提示という企図（cfr. Scarano 1986: 68-75）や歴史の解読への貢献の自負（cfr. 小倉 1997: 277-9）があったのである。

3）Petrocchi（1971: 132）はこれを「読者は直感的に，薄いが確かに存在するガラスが，物語の叙述を歴史の叙述から隔てていることに気づく」と表現している。

4）匿名手稿が虚構の指標として機能しうることについては，霜田（2011）で詳しく論じた。

5）ほかに Grosser（1981: 435-7）や「偽装引用 pseudocitazione」を詳しく論じた Illiano（1993: 88-97）などが挙げられる。

6）例えば第 24 章の末尾 (*PS*, XXIV, 96) では，インノミナートの回心という史実に関して，匿名作家がリパモンティやリーヴォラの記していない細部を書き残している，と述べられる。匿名作家が 2 人の実在の作家と比べられているのである。

7）Cfr. Ginzburg (2006b: 15-6); Bigazzi (1989: 8); Scarano (1990: 67).

8）ただしヘイドン・ホワイトらの議論が歴史叙述の物語性・レトリック性を強調し，歴史をフィクションの側へ引き寄せたのに対し（cfr. Ginzburg 2006a: 308），*I promessi sposi* 研究においては，匿名手稿が「史料」と同様に批判的な距離を持って扱われることや，その引用行為が一貫して継続されることなどを根拠に，フィクションから歴史の側へという逆向きの接近が指摘されることが多い。

9）これは Scarano（1990）が提出した考えであり，歴史とフィクションの連続性をめぐる実りの少ない論争に対して発想を転換したものと位置づけられる。このような特徴の多くを互いに共有するテクスト群が，固有の伝統を有する一つの文学ジャンル「歴史叙述」を形成していると考えられる。本稿では，一つの文学ジャンルを指す場合は特に「歴史叙述」と表記し，「歴史記述」「歴史を語るテクスト」など別の表現を用いる場合はこれを含意しないものとする。

10）「真実効果」の語は，カルロ・ギンズブルグの «l'effetto di verità» に想を得ているが（Ginzburg 2006b），本稿では「本当にあったことと実感させる効果」という程度の意味に用いる。

11）この見方が，歴史叙述といわゆるリアリズム小説に形式的な同質性を見出す契機となっている（cfr. Benveniste 1966: 239-41; Barthes 1988 [1967]: 141-2）。ただし，Scarano（2004: 7）によると，理論に反して実際上は，非人称的な叙述はそれほど徹底されていない。

12）これには，本文から明瞭に区別されたパラテクストだけではなく，「前置き」「導入」の機能を担う文

が広く含まれる。

13）もちろん架空の物語の場合にも，前もって執筆の動機が語られることは多々あるが，Scarano（1990: 75）によれば，それはフィクション自身の特徴ではなく，「フィクションの物語のなかに見出される，歴史の言説を模倣した多くの形のひとつ」である。フィクション（小説）による歴史叙述の形式の模倣については，Ginzburg（2006a [1984]: 303-5）も参照。

14）Parrini（1996: 117-20）は，28 章では物語の理解に直接的には寄与しないはずの部分のほうに多くのページが割かれていることを指摘して，この目的の純粋性に疑問を投げかけている。

15）ただし 12 章の暴動の記述の場合は，文脈上明らかではあるものの，こうした動機が言明されていない。一方，22 章の伝記的記述は，このような理由では正当化されないものであり，それゆえ実際，〈著者＝語り手〉自身が読み飛ばしてよいと明言する。

16）架空の物語の要請を超えて，祖国の歴史の一端を知らせること自体も，叙述の目的として主張されるのである。

17）Cfr. Scarano 1990: 75-6; 2004: 13-7. 野家（1998: 72-3）は，歴史記述を「物語り行為」という言語行為とみて，「記憶せよ！」という発語内行為が遂行されていると説く。

18）E. H. カーは『歴史とは何か』の IV 章「歴史における因果関係」冒頭で「歴史の研究は原因の研究」と述べている（カー 1962 [1961]: 127-30）。

19）飢饉については本篇に予告的要素が多く，戦争（戦渦）とペスト禍には詳述前にそれぞれ「新たな《鞭／災厄 flagello》［最初の災厄は飢饉］」「災禍 disastro」との意義付けも見られる（*PS*, XXVIII, 62; XXXI, 7）。なお，傭兵軍団のミラノ領通過は，〈戦争＝災厄〉の範疇ではあるものの，個別の事件としては予告がなく（草稿 *Fermo e Lucia* には示唆があったが出版稿では消える。Cfr. Parrini1996: 154-5），例外的にやや唐突に語られる出来事とも言える。

20）もちろん物語の美的価値をあらかじめ強調することには重要な意味があり，Rosa（2008: 136-7）は，それを特に当時の「語りの契約」という文脈において考察している。

21）「ただ，取るに足らぬ卑しい人々の身に起こったとはいえ，記憶に値する出来事を知り及んだがゆえに，率直にありのまま物語乃至は報告にして，その記憶を後世に残そうと筆を執ったばかりである。その報告の中で，狭隘な劇場において痛ましい恐怖の悲劇，壮大な悪辣の場面が上演され，徳高き偉業と天使の善良が悪魔的所業に対抗し介入するのを目にするだろう。」（*PS*, *Intr*. 3-4）

22）なおマンゾーニは「歴史叙述」の著作と言える『ロンゴバルド史に関する諸問題』（1822）の序文においても，「この歴史がいかに重要で，いかにまだ欠けているか」を示して真実を支持する者にさらなる研究を促すことが論考の目的であると記している（*Discorso*, 11）。

23）「汚名柱の記」は決定版（40 年版）において初めて出版されるが，「別のテクストのために残しておく」という言葉は初版（27 年版）にも既に見られる（*PS V*, XXXII, 69）。40 年版では同箇所に註がついて «*V. l'opuscolo in fine del volume» と記される。なお「叙述の不完全さ」は，他の歴史記述部分においても，本篇の補助という動機と結びついて暗に示される。つまり「通り一遍の知識を与えるのに足りるだけ」（*PS*, XXVII, 1），「できるだけ手短に」（XI, 73）といった言葉が，テクストの外に語るべき事柄の総体が存在し，その全てが語られてはいないことを示唆するのである。

24）さらに 40 年版の 32 章では，ボッロメーオ枢機卿の記した *De Pestilentia* の一節がファクシミリとしてテクストの間に挿入され（27 年版では脚註だった），また Ambrogio Spinola や Antonio Ferrer の署名も複製され，テクストの中に組み込まれることになった。Cfr. Cadioli (2001: 216).

25）模範例は，安く抑えられたパンの価格の行方について述べた「確実な資料に欠けるとき推測を持ち出すことが許されるなら［…］という考えに我々は傾く」(*PS*, XXVIII, 13) という発言である。

26）例えば 31 章で，ミラノ市に最初にペストが侵入した状況ついて諸報告の食い違いが提示される（*PS*, XXXI, 24-5. 本稿 2.（3）参照）。また決定版では，ペストの死者数および «monatti» の語源に関する見解の相違も紹介されるが（XXXII, 27; 29），いずれも数少ない決定版での増補の例である。

27）Scarano（1990: 89-90）は，歴史の言説が常に肯定の断定文となると見なす Barthes（1988 [1967]）の考えに異を唱え，断定的な語りは，本来的な意味での「歴史叙述」の特徴ではなく，むしろフィクションにこそ固有のものと見る。「歴史の言説が断定文の形を採るとき［…］《フィクション fictio》の形

式を模している」（p. 90）のである。またScarano（2004: 189; 196-7）は，歴史小説が歴史を語る際にも，通常確実な情報だけが対象とされ，総じて断定調になると考えている。この意味において，*I promessi sposi*（特に28, 31-2章）の叙述は，普通の歴史小説とは全く異なることになるだろう。

28）フィクションが「本当らしい，ありそうなこと」しか語れないのに対し，歴史叙述は信頼できる史料を担保として「ありそうにないこと」をも語ることができるが，史料がないときはフィクションと同じく「本当らしさ」に訴えることになる。しかし，それをあくまで推論だと明示する点が重要であり，Scarano（1990: 95）によれば「歴史のテクストにおける本当らしさは，それが想像による表象の産物だと前もって表明されるがゆえに，破格」であって，フィクションの語りに固有の約束事としての本当らしさとは異なるのである。

29）実在の人物の紹介と史実・史料の関係については，霜田（2011: 特に54-63）を参照。

30）「このいたましい話をもう少し詳しく知りたい人は，我々が別のところでこの人物に関連して引用した本の当該箇所にその話を見つけられるでしょう*。*Ripam. Hist. Pat., Dec. V, Lib. VI, Cap. III.」（*PS*, XXXVII, 45; 星印*は脚註）。

31）ただし仄めかしは散見される。例えば，22章（枢機卿の伝記）に「そうした美徳について彼の伝記作家たちが書き留めた多くの特異な例のうち，ここでは一つだけ引用しよう」（*PS*, XXII, 34）という表現がある。その「引用」には引用符もレファレンスも付されないが，ともかくも下敷きとしての史料の存在は示されていると言える。

32）肯定の断定文中心の叙述は，Scarano（2004: 189; 196-7）によれば歴史小説の特徴でもあるので（註27を参照），この箇所に限っては*I promessi sposi*も他の歴史小説と大差ないことになる。

33）本稿2.（1）を参照。あるいは「物語形式」による歴史の叙述を試みたécole narrative（物語派）の例もある。例えばティエリの『メロヴィング王朝史話』は，トゥールのグレゴリウスらのラテン語をしばしば翻訳・パラフレーズしているが，登場人物が発した言葉以外には引用符などの明示的な印がつけられず，おおまかな対応箇所が脚註で示されるのみとなっている。

34）マンゾーニは，史劇『アデルキ』（1822）の本篇前の「歴史上の記録Notizie storiche」において歴史研究の結果としての事実のみをひとまず記述しているが，単なる事実の列挙では不完全だとして，『アデルキ』に付して出版した『ロンゴバルド史に関する諸問題』の第1章で，それらを「事実」と考えるに至った過程を開示している。Cfr. Muñiz Muñiz (1991: 468-70).

35）「この事象についてより十全に理解したいと思う人に対して，報告原本を読まなくてよいようにしてやろうなどという企図はもっと少ない。どのように着想され，出来栄えがどうであれ，この種の作品の内には常に，鮮烈で，固有の，そして言わば説明のしようのない力があることを，我々はあまりにも感じているからだ」（*PS*, XXXI, 6.　下線は引用者，以下同様）。

36）「引き出す」「引き寄せる」というイメージは，引用行為に必須の「再現への志向」と結びついている。括弧や斜体は，他人の言葉の「忠実な再現である」ことを約束してみせるための印なのである。引用における再現については，Mortara Garavelli（2009: 43-72特に45）；木村（2011: 151-5）を参照。

37）草稿段階の二種類の序文から出版稿の序文へと「緒言」の推敲過程を追うと，17世紀の文体の模倣に注意が傾けられたことが確認される。なお決定版の「緒言」は斜体で，終わりには「”」が付く。

38）飢饉の惨状を描く28章の序・中盤では，この箇所以外にも広い範囲で同書の記述が使われている。飢饉の叙述は（歴史家たちがその「描写ritratto」を残したことに触れた後）「以下がその痛ましい描写の《写しcopia》である」と始まるため（*PS*, XXVIII, 14），史料に則っていることは強調されていると言えるが，同書が名指されることはない。記述の対応関係についてはRepossi（2009: 513-21）を参照。なお，途中に挟まる枢機卿の逸話では別の史料が明示的に引かれている（*PS*, XXVIII, 29-31）。

39）例えば31章冒頭に（*PS*, XXXI, 3），リパモンティの記す事実が，量および選択，さらに「観察の仕方」において，誰より優れているという評価が見られる。

40）知り及んだ経緯についても匿名作家が自ら説明することはなく，主人公レンツォから直接聞いたというのは語り手の見解である（«tutto conduce a credere che il nostro anonimo l'avesse sentita da lui [=Renzo] più d'una volta» *PS*, XXXVII, 11）。なお語り手は，匿名作家の他の作中人物への取材も示唆している（XI, 39; XV, 55）。

41）«ed avendo io osservato nel lungo giro dei miei anni molte e straordinarie vicende»; «Narrando adunque come fedele spettatore li accidenti singolari da me osservati» (*FL*, *Intr*. Prima, 3 e 7). なお，草稿の第二序文（全体を書き終えてから改めて書いたもの）では，もはや目撃証言ではなくなっている。

42）本文中で一度，手稿の内容の信憑性が話題となるが，そこでも「本当らしさ」が確認される結果となる。26 章冒頭で語り手は，手稿の記すボッロメーオ枢機卿の言葉に疑念を呈してみせるのだが，史実としての本人の行動と矛盾しないとして結局はそのまま受け入れるのである（*PS*, XXVI, 1）。

43）マンゾーニ自身，論考『歴史小説について』（1850）で，後世のための記録となるとは想定されずに書かれた資料をも調査するよう歴史家に促しており（*RS*. 75），マルク・ブロックは『歴史のための弁明』2 章 2 節「証拠」において（邦訳 2004: 42-50），歴史研究の発展における「文献が言おうと望まなかったのに聞かせてしまう事項」（p. 45）の領分の拡大を強調する。行間に見出される前提や文脈を証拠として提示すること，そこに叙述（ナレーション）との摩擦・緊張が生じること，をめぐる Ginzburg（2000: 44-9, 51-67）の考察も参照。

44）決定版では全 27 のうち 26 例がレファレンスとなる（初版では，本文で著者が名指されて引用元が前掲書だとわかる場合にもページのみを記した脚註が付されていたが，決定版ではそのほとんどが削られ，脚註の数が減った。本稿註 24 も参照）。なおレファレンス以外の 1 回は，本文中トスカーナ語で表されたパン屋の店名 il forno delle grucce のミラノ方言での表記 El prestin di scansc を示す註である（*PS*, XII, 21）。Genette（1989 [1987]: 319）は，註の多くを引用のレファレンスや情報源の提示といった権威の召喚に充てる著作の例として，ミシュレやトクヴィルらの歴史書をあげている。

45）引用された表現は，意味と文法構造を備えたものとして新しいテクストの言説に組み込まれ「使用」されると同時に，その表現自体に「言及」している（cfr. Mortara Garavelli 2009: 53; 木村 2011: 114-28）。コンパニョン（2010 [1979]: 445）によれば，引用とレファレンスは論理的には等価で，同じ外示を有する。

【テクスト】

Alessandro Manzoni

PS *I romanzi*, a cura di S. S. Nigro, Milano, Arnoldo Mondadori, 2002; vol. II, tomo II: *I promessi sposi (1840); Storia della colonna infame*.

PS V *I romanzi*; vol. II, tomo I: *I promessi sposi (1827)*.

FL *I romanzi*; vol. I: *Fermo e Lucia*.

Discorso *Discorso sopra alcuni punti della storia longobardica in Italia*, a cura di Isabella Becherucci, Milano, Centro nazionale studi manzoniani, 2005.

RS *Del romanzo storico e, in genere, de' componimenti misti di storia e d'invenzione*, a cura di S. De Laude, Milano, Centro nazionale studi manzoniani, 2000.

マンゾーニの作品の引用・参照については，ページ数ではなく，上記エディションの採用する段落分けを記した。

Giuseppe Ripamonti

De peste *La peste di Milano del 1630: De peste quae fuit anno MDCXXX libro V*, a cura di Cesare Repossi; traduzione di Stefano Corsi; premessa di Angelo Stella, Milano, Casa del Manzoni, 2009.

Augustin Thierry

Récits *Récits des temps mérovingiens; précédés de Considérations sur l'histoire de France*. Tome II (3a ed.), Paris, J. Tessier, 1842.

【引用参考文献】

Barthes R.

1988 *Il discorso della storia*, in *Il brusio della lingua*, Torino, Einaudi, 138-149 [*Le discours de l'histoire* in «Information sur les sciences sociales», VI, 4, 1967, 65-75, ora in R. Barthes, *Le bruissement de la langue*, Paris, Seuil, 1984, 153-66].

Benveniste É.

1966 *Les relations de temps dans le verbe français*, in *Problèmes de linguistique générale*, Paris, Gallimard, 237-50.

Bigazzi R.

1989 Premessa a *I racconti di Clio. Tecniche narrative della storiografia*. Atti del convegno di studi (Arezzo, 6-8 novembre 1986), Pisa, Nistri-Lischi.

1996 *Le risorse del romanzo: componenti di genere nella narrativa moderna*, Pisa, Nistri-Lischi.

Cadioli A.

2001 *La storia finta*, Milano, il Saggiatore.

Duchet C.

1975 *L'illusion historique. L'enseignement des prefaces (1815-1832)*, in «Revue d'Histoire Littéraire de la France», LXXV, 2-3, 245-267.

Genette G.

1989 *Soglie: I dintorni del testo*, a cura di C. M. Cederna, Torino, Einaudi [*Seuils*, Paris, Seuil, 1987]

Ginzburg C.

2000 *Rapporti di forza: Storia, retorica, prova*, Milano, Feltrinelli.

2006a *Prove e possibilità*, postfazione a Natalie Zemon Davis, *Il ritorno di Martin Guerre. Un caso di doppia identità nella Francia del Cinquecento*, Torino, Einaudi, 1984, ora in C. Ginzburg, *Il filo e le traccie: vero falso finto*, Milano, Feltrinelli, 295-315.

2006b *Descrizione e citazione*, in *Il filo e le traccie: vero falso finto*, Milano, Feltrinelli, 15-38.

Macchia G.

2000 *Manzoni: l'invenzione e la storia*, premessa a *RS*, XIII-XVII.

Mortara Garavelli B.

2009 *La parola d'altri: prospettiva di analisi del discorso riportato*, Alessandria, Edizione dell'Orso, ed. riveduta da S. Sini [1ª ed. Palermo, Sellerio, 1985].

Muñiz Muñiz M. de las Nieves

1991 *Il lettore secondo Manzoni*, in Ulich Schultz-Buschhaus et al. *Scrittore e lettore nella società di massa, sociologia della letteratura e ricezione, lo stato degli studi*, Trieste, Lint, 451-474.

Parrini E.

1996 *La narrazione della storia nei "Promessi sposi"*, Firenze, Le Lettere.

Petrocchi G.

1971 *Manzoni. Letteratura e vita*, Milano, Rizzoli.

Repossi C.

2009 *Il* De peste *fonte per* I promessi sposi*: Rassegna di testi a confronto*, in *De peste*, 509-88.

Rosa G.

2008 *Il patto narrativo*, Milano, il Saggiatore.

Scarano E.

1986 *Riscrivere la storia: storiografia e romanzo storico*, in E. Scarano et al. *Il romanzo della storia*, Pisa, Nistri-Lischi, 9-83.

1990 *La parola dello storico e la parola degli altri*, in E. Scarano e D. Diamanti (a cura di), *La scrittura della storia*. Atti del seminario di studi (Pisa, gennaio-maggio 1990), Pisa, Tipografia

Editrice Pisana, 67-99.
2004 *La voce dello storico. A proposito di un genere letterario*, Napoli, Liguori.
Tommaseo N.
1828 *Discorso preliminare* in *Opere di Alessandro Manzoni milanese con aggiunte e osservazioni critiche,* Prima edizione completa, Tomo primo, Firenze, i fratelli Batelli, V-XIX.
ブロック M.
2004 『歴史のための弁明：歴史家の仕事』松村剛訳（新版），東京，岩波書店 [*Apologie pour l'histoire ou Métier d'historien,* édition annotée par Étienne Bloch, Paris, Armand Colin, 1993, 1997].
カー E. H.
1962 『歴史とは何か』清水幾太郎訳，東京，岩波書店 [*What is History?: the George Macaulay Trevelyan lectures delivered in the University of Cambridge, January-March 1961,* London, Macmillan, 1961].
コンパニョン A.
2010 『第二の手，または引用の作業』今井勉訳，東京，水声社 [*La seconde main ou le travail de la citation*, Paris, Seuil, 1979].
木村大治
2011 『括弧の意味論』，東京，NTT 出版.
野家啓一
1998 「歴史のナラトロジー」，野家啓一ほか『歴史と終末論』（新・哲学講義８），東京，岩波書店，1-76.
2005 『物語の哲学』，東京，岩波書店.
小倉孝誠
1997 『歴史と表象―近代フランスの歴史小説を読む』，東京，新曜社.
霜田洋祐
2011 「*I promessi sposi* における真実と虚構 ―虚構の指標としての匿名手稿について―」，『イタリア学会誌』第 61 号，45-69.
2012 「「我々」とは何か――*I promessi sposi* の語り手の一人称について――」，『イタリア学会誌』第 62 号，1-25.

Historiography in *I promessi sposi* :

Manzoni's technique of quotation

Yosuke SHIMODA

Abstract

The narrative of Alessandro Manzoni's historical novel *I promessi sposi* (1827; definitive edition, 1840-2), adopts the pretense that the novel is based on a 17th century manuscript and should be considered factual; this fictitious narrative is then accompanied by historiographical sections, based on various historical sources. This pretense of factuality plays an essential role in smoothly connecting the two different parts, and studies on the narrative technique of *I promessi sposi* have emphasized the formal (textual) similarities between the fictitious story and the historiographical sections. However, a more careful analysis reveals this unity on the formal level of the text to be only superficial. In this article, we will compare the historiographical and the fictitious parts of the novel in terms of the textual characteristics of their respective genres, and especially in terms of the effective use of citation, taking note of the way the fictional part imitates the genre characteristics of the historiography. In this way, it will become clear that in the narration of fact Manzoni displays great ability as a historian, while in the imaginary story the imitation of the formal features of the historiography is more limited than is ordinarily argued.

Keywords: Alessandro Manzoni, *I promessi sposi*, Historical novel, Narrative technique, Historiography